

耳を澄ます活動から学ぶ

—環境を通して行う教育及び保育を考える授業例—

有川 優子

ARIKAWA Yuko

本稿は「保育内容総論」の授業内で行った実践報告である。幼児教育及び保育の基本は「環境を通して行う」ことであり、子どもたちは環境との相互作用によって多くのことを学ぶ。本稿では「環境を通して行う教育及び保育」を体験的に学ぶ一つの方法として「耳を澄ます活動」を実践した。活動における学生の自由記述から、気づきや学びの傾向を明らかにすることを目的とする。

キーワード：保育内容総論、環境を通して行う保育、環境、表現、豊かな感性、保育者養成

1. はじめに

本稿は「環境を通して行う」教育及び保育について体験的に学ぶことを目的に行った「耳を澄ます活動」の実践報告である。

保育内容総論の授業実践に関する研究は数多くなされ、その中でも実際に学生が体験することによって学びを深める授業実践としては、清水(2015)¹、森本(2018)²などがある。清水の研究では学生が実際に、積み木(カプラ)で遊び、その遊びの経験から5領域とのつながりを考え、学びを深める授業実践が報告され、森本の研究では、保育と5領域の関係について理解を深める一つの例として、学生が絵で保育と5領域の関係を描く実践が報告されている。

環境を通して行う教育及び保育に関する先行研究としては、保育現場で働く保育者を対象に、人的環境としての保育者の役割を調査した平松(2019)³の研究や、5歳児クラスを対象に、子どもが主体的に学べる環境構成の仕掛けをし、そのエピソード記述から、子どもの興味・関心・意欲などを読み取り、子どもの行動と環境(仕掛け)の相互作用について分析・考察を行っ

た佐々木ら(2021)⁴の研究、保育者養成校における環境を通して行う教育の授業と、その他の教科との連関に関する重成(2011)⁵の研究などがある。

先行研究を概観すると、保育者養成校において学生が「環境を通して行う教育及び保育」を体験的に学ぶ授業実践報告は現段階では見当たらない。

加えて、本稿では2017年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「表現」において、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」⁶が付け加えられたことに着目し、「耳を澄ます活動」に焦点を当てた。

本稿では「耳を澄ます活動」において学生が書いた自由記述から、様々な環境と関わる中でどのような気づきや学びがあったのかを考察した。

2. 「環境を通して行う」とは

幼児教育及び保育の基本は「環境を通して行う」ことであり、その基本は1989年の「幼稚園教育要領」の改訂において初めて打ち出された。その基本理念は、2017年に改訂された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼

保連携型認定こども園教育・保育要領すべてにおいて受け継がれている。

現行の各要領・指針及び解説書では「環境」の重要性や「環境を通して行う」教育及び保育の特性について次のように示している。

幼稚園教育要領では「教師は、幼児の主体的な活動が確保されるよう幼児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。」⁷とし、「環境を通して行う教育」の特質として、「幼児の関わりたいという意欲から発してこそ、環境との深い関わりが成り立つ。この意味では、幼児の主体性が何よりも大切にされなければならない」⁸ことや、「幼稚園教育は、幼児自らが積極的に事物や他者、自然事象、社会事象など周囲の環境と関わり、体験することを通して、生きる力の基礎を育て、発達を促すものである」⁹と明記している。

保育所保育指針や幼保連携型認定こども園教育・保育要領においても幼稚園教育要領同様に、「環境を通して行う」教育及び保育について明記されている。

3つの要領・指針及びその解説書を概観すると、「環境を通して行う」教育及び保育とは、生きる力の基礎を育み、子どもの健やかな育ちを支えるものである。乳幼児期は、生きる力の基礎を育む時期であり、「特に身体感覚を伴う多様な経験が積み重なることにより、豊かな感性とともに好奇心、探求心や思考力が養われる。…(中略)…諸感覚を働かせた多様な活動を生活や遊びの中で経験することが大切」¹⁰とされている。

すなわち、子どもの生きる力の基礎を育むには、様々な環境と出会い、主体的に関わり、相互に関連し合うことを通して、「充実感や満足感を味わえるような直接的な体験」¹¹が必要となる。この経験を通して豊かな感性を育むことができる。

子どもの内にその豊かな感性を育むためには、まずその周囲にいる大人、つまり幼稚園教諭、保育士、保育教諭自身が豊かな感性を持っている必要がある。そのことについては領域「表現」で以下のように明記されている。

「幼児が出会う美しいものや心を動かす出来事には、完成された特別なものだけでなく、生活の中で出会う様々なもの」¹²があり、幼児が「日常の生活の中でこのような自然や社会の様々な事象や出来事と出会い、

それらの多様な体験を幼児のもっている様々な表現方法で表そう」¹³とするとき、重要なことは「教師が幼児の感じている心の動きを受け止め、共感すること」¹⁴であり、そのためには「教師自身も豊かな感性をもっていること」¹⁵が必要であると記されている。

一方で、保育者が豊かな感性を持ち合わせていないことによる弊害としては、幼児が心を動かされる体験をしたときに、その心情を周りにいる教師や友達などに受け止められないと、次第にその体験を通して感じたことの印象が薄れてしまうことが多いという¹⁶。それはすなわち、教師自身が豊かな感性を持ち合わせていないことによって、子どもの生きる力の基礎を育む貴重な機会を奪ってしまう恐れがあることを示している。そこで教師には「幼稚園生活の様々な場面で幼児が心を動かされている出来事を共に感動できる感性」¹⁷が求められる。

幼児の豊かな感性は「幼児が身近な環境と十分に関わり、そこで心を揺さぶられ、何かを感じ、考えさせられるようなものに出会って、感動を得て、その感動を友達や教師と共有し、感じたことを様々な表現することによって一層磨かれていく」¹⁸ものとされ、子どもと関わる保育者は人的環境としても子どもに大きな影響を与える存在である。

これらのことを踏まえ、本稿では、「環境を通して行う教育及び保育」を体験的に学ぶ一つの方法として「耳を澄ます活動」を実践し、活動における学生の自由記述から、気づきや学びの傾向を明らかにすることを目的とする。学生の気づきや学びの傾向を把握するためにテキストマイニングの手法を用いた。

3. 方法

調査期間：2021年6月17日、18日

(1回目：遠隔対面併用授業)

2021年6月24日、25日

(2回目：対面授業)

コロナウィルスの影響により、遠隔対面併用時と対面時に調査を行った。

調査対象：保育職志望の短期大学2回生・3回生63名(欠席者によって人数の変動あり)

材料：調査用紙2部、(各日 1部)

調査方法：授業内で以下の課題を提示した。

1回目の調査時は、遠隔対面併用授業であつ

たため、各々の環境下による実施であった。

2回目の調査時は対面授業であったため、被験者全員が同じ条件の下で実施することができた。

分析：自由記述に該当する1回目の調査の課題項目③④、2回目の調査の課題項目①⑤を、テキストマイニングツール(<https://textmining.userlocal.jp/>)を用いて分析した。

調査項目は、土田(2007)¹⁹のサウンドエデュケーション²⁰の技法を手がかりに、筆者が作成したものである。

土田はサウンドエデュケーションの基本として「音聴取志向の活動(音をよく聴く事)」と「音表現志向の活動(音を表現しなす事)」の2つの傾向があることを示している。土田は聴く耳を持たなければ音は聞こえていないのと同じことを指し、「音聴取志向の活動(音をよく聴く事)」の具体的な方法として、その場で聞こえる音をすべて聞き取ってメモをするという「音を聴きとり、聞き分ける訓練」を挙げている²¹。つまり、この活動は意識して周りの音に耳を傾け、聞き取ったものを記録するという活動を意味している。もう一つの傾向として土田が挙げている「音表現志向の活動(音を表現しなす事)」とは、何らかの形で表現することで客観化され、自分の音に対する認識について考えるための活動であり、具体的な方法として、聴覚以外の他の知覚によって認識できるものへと変換したりすることを挙げている²²。

これらを参考に、「音をよく聴く事」に関しては、意識して周りの音に耳を傾け、聞き取ったものを記録するという活動に加えて、より集中して音を聴くために、目を閉じた状態で耳を澄ますことや、耳を澄まさなければ聴く事ができない楽器「キンダーハープ」²³を使用し、「耳を澄ます活動」を行った。「キンダーハープ」は、主にシュタイナー教育において使用される楽器であり、「共鳴盤がなく、繊細で純粋な音が出る」²⁴とされている。シュタイナー教育を取り入れた子ども園で勤務する吉良(2002)によると、保育室においてキンダーハープを奏でたとき、そこには「一瞬の静けさが広がる」²⁵と述べており、今回の調査では、耳を澄ますことができるように、キンダーハープを使用した。曲は調査時期の季節に合わせ、「七夕」を演奏した。

「音を表現しなす事」に関して、聞き取った音を擬

音語で表現したり、感じ取ったことなどを文章で表現したりするなどの自由記述で行った。

1回目と2回目の調査で使用した質問の項目は以下の通りである。

◆1回目の調査

調査日：2021年6月17日、18日

授業形態：遠隔対面併用授業

対面9名・遠隔48名 計57名 (6名欠席)

課題項目①

目を開けた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。(3分間)

課題項目②

次は、目を閉じた状態で、耳をすまし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。(3分間)

課題項目③

目を開けた状態と目を閉じた状態で聞こえた音の変化はありましたか。

課題項目④

「日常の音に耳を澄ます活動」を通して感じたことを書いてください。

◆2回目の調査

調査日：2021年6月24日、25日

授業形態：対面授業

対面57名 (6名欠席)

課題項目①

キンダーハープの音色を聞いてどのように感じましたか。

課題項目②

外で目を開けた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録しましょう。(3分間)

課題項目③

外で目を閉じた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。(3分間)

課題項目④

室内や外での活動で、耳から入る情報以外に、何かを感じ取りましたか。

課題項目⑤

室内と室外での活動を比較してみて、何を感じましたか。

*倫理的配慮

個人の名前が特定されないよう、個人名は匿名にすることを伝えた。

4. 結果

自由記述に関してはテキストマイニングツールを用いて頻出語を抽出した。紙面の関係上、全員の自由記述を記載することができなかつたため、頻出語をもとにカテゴリー化し、例として自由記述の一部を抜粋した。

4-1 【1回目の調査の結果】

対面の9名は本学の教室にて行い、遠隔で参加した48名の多くは自宅にて「耳を澄ます活動」を行った。そのため、被験者の自宅では各々聞こえる音は異なるものであった。

課題項目①「目を開けた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。」(3分間)

課題項目②「目を閉じた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。」(3分間)

対面においては同じ状況下において耳を澄ますことができたが、遠隔で参加した被験者は各々の家庭において聞こえる音は異なることが分かり、聞こえる音も多岐にわたるものであった。

(対面) エアコンの音、プロジェクターの音、他の教室の声、書く音、消しゴムを置く音、機械音、消しゴムのカスを手で払う音、筆箱に触る音、風の音、鳥の声、車の音、紙に触る音、服のすれる音

(遠隔) 時計の音、車の音、飛行機が通る音、犬が動いている音、新幹線が通る音、救急車の音、扇風機の音、冷蔵庫の音、家族の声や足音、自分の呼吸の音、テレビの音、料理している音

課題項目③「目を開けた状態と目を閉じた状態で聞こえた音の変化はありましたか。」

記述内容 (一部抜粋)

テキストマイニング分析の結果、頻出語が高いものとして「音」「聞こえる」「閉じる」「集中」「雨の音」「鮮明」「変化」「澄ます」が挙げられた。「雨の音」などの自然の音が聞こえたと答える学生が多かった。また「集中」することで自分の心臓の音が聞こえたという学生もいた。

・「集中」して聴くこと

目を閉じた状態のほうが「集中」して音を聴くことができたという学生が多かった。また意識的に耳を澄ますことについてはより「集中」して聴くことができたという学生もいた。「目を閉じて聴くことによって『聞こう』という意識が芽生えた」と答える学生もいた。

・「雨の音」に耳を澄ますこと

「雨の音」については目を開けた状態で聞いた場合と閉じた状態で聞いた場合とを比較し、聞こえ方の違いがあると答える学生が複数名いた。特に目を閉じた状態のほうが、同じ「雨の音」にも色々な音があることが分かったことや、同じ「雨の音」でも集中して聴くととても大きく聞こえたなどと挙げている。

また「雨の音」について擬音語を使って表現する学生もおり、具体的には「ザーザー」「ポツポツ」「ザー」「シトシト」など様々な擬音語で表現していた。

・「自分の内面」に耳を澄ますこと

目を閉じることによって自分の外の世界で聞こえる音だけではなく、自分自身の内面に耳を澄ますことができたという学生もいた。調査対象の学生のうち、少数ではあるが、「目を閉じた状態では自分の内の音が聞こえる気がした」と答えた学生や、自分の「心臓の音」「呼吸の音」が聞こえたなどと答える学生がいた。また「深い音まで聞こえた。神経が敏感になっていると思った。」と記述している学生もいた。学生が述べた「自分の内の音」や「深い音」とは具体的にどのようなものなのかは不確かではあるが、耳で聞こえる音以外に、学生自身が自分の内面で感じていることに目を向けていると思われる表現があった。

課題項目④「『日常の音に耳を澄ます活動』を通して感じたことを書いてください。」

記述内容 (一部抜粋)

調査に参加した学生の多くが、普段、耳を澄ます経験がないため、今回の耳を澄ます活動を通して、新たな発見があったことや、耳を澄ますことの面白さを感じていることが分かった。テキストマイニングの結果、頻出語として「音」「聞こえる」「澄ます」「普段」「集中」「日常」「意識」「静か」「面白い」「自然」「雨の音」「気づく」などが挙げられた。また保育者養成の大学

で学ぶ学生ということもあり、保育現場での活用について言及している学生もいた。

・意識して「普段気づかない音」に耳を澄ますこと

意識して耳を澄ますことによる新たな発見があったと答える学生は次のように述べる。「普段は気づかないけれど色々な音が溢れていると感じ、それらの音は『聞こう』と思わないと聞こえなかったりもする、目に見えるものや聞こえるもの、それぞれに『ただ見える』とか『聞こえる』ということだけでなく、『見よう』『聞こう』とする姿の中に、色々な気づきがあるのではないかと考えた」とあり、意識して聞くことによる新たな気づきが述べられている。他にも「目を閉じて耳を澄ますと、日頃気にしていなかった音が聞こえて気になった」、「耳を閉じて澄ましてみれば普段過ごしている時には聞こえない音も聞こえたりして、目を閉じてみるのも分からなかったことに気づかせてくれるような感じがしたのでいいなと思った」、「世の中にはたくさんの音が溢れている。今も静かだと思っていたが、かなり色々な音が聞こえた。小さな音は意識的に耳を澄まさないといけないまま、終わってしまうことが多いと思った」、「日常の中で音を聞くことは多いと思う。普段何気なく耳にしている音でも目を開けているか閉じているかで聞こえ方が全く異なっていることに気づいた。心も落ち着くことができるため、とても良いことだと思う」と新たな気づきがあったと述べる学生が数多くいた。

・耳を澄ますことの面白さ

自由記述の中で耳を澄ますことの面白さについて述べる学生もいた。例としては、「今日は雨の日だったから雨の音がしたが、晴れの時や曇りの時はまた違った音がするのかなと思い、気になった。なんだか新鮮でとても面白かった」や、「日常的に何気なく聞いている音も良く聞くと『あれ？こんな音だったっけ？』と思うこともあったりして面白い」、「意識して聞いていたら普段気にならない音も聞こえてきて不思議だった」「当たり前のようにいつも意識せず聞いている音とか意識して聞いてみるとたくさんの音が聞こえてきて面白いと思った」、「普段過ごしていても小さな音等周りの音を気にしていなかったけど、集中することによってたくさんの音が聞こえてきて面白いと思った」などがあった。このように日常生活の中で何気なく聞いている音に耳を澄ますことを面白いと捉える学生もいた。

・保育現場での「耳を澄ます活動」の活用

本学は保育者養成校であるため、保育者を目指す学生ならではの意見も少なからずあった。例としては「子どもたちとも静かにしてみても聞いてみる活動をしてみたいと思った」、「普段何気なく生活していく中では聞こえてこない音や声が聞こえてくることに面白さを感じた。またいつもいかに当たり前のように音を聞き流しているということが分かったので、保育の現場に出た時に子どもたちの活動で実践してみようと思った」や、「目を閉じた目を開けた状態では音の感じ方や聞き取り方が違うという面白さを感じた。また生活音をじっくり聞くことがないので小鳥の声や車の音、飛行機の音等をじっくり聞けたので子どもたちと関わる際に役立つなと思った」などと記述している。

また自身が保育者になる上で身につけておきたいことについては「日常音は普段耳に入ってくるが、意識して聴いたことはあまりないと感じた。日常には音が溢れていると思ったので普段は見逃しているものや音などの環境があるのだろうと思った。子どもと様々なことに反応できる感性を養っておきたいと思った。」と述べている。

これらのように「耳を澄ます活動」を保育現場で活用したいと考える学生や、「耳を澄ます活動」を通して保育者として感性を養うことの重要性に気づいた学生がいた。

4-2 【2回目の調査の結果】

2回目の調査時は、対面授業であったため、参加者57名が同じ条件下で調査を行うことができた。

キンダーハープの音に関して、被験者57名全員が、初めて耳にする音であった。2回目の調査において「耳を澄ます」ための一つの方法として、シュタイナー教育で使用されるキンダーハープを学生が聞き、自由記述を求めた。学生の記述ではキンダーハープの音というのは、「耳を澄まさなければ聞こえない音」であり、「優しい音色で心が落ち着いた」という意見が多かった。

課題項目①「キンダーハープの音色を聞いてどのように感じましたか。」

課題項目①のテキストマイニングの結果、頻出語として「音色」「小さい」「落ち着く」「優しい」「きれい」「聞こえる」「静か」などが挙げられた。

記述内容 (一部抜粋)

・キンダーハープ：「優しい音」「落ち着く音」

音を、大きい小さいだけで表現するのではなく、「優しい」「落ち着く」などの言葉を使用し、表現する学生が多かった。例えば「小さい音だけとても落ち着く音」や「耳を澄まして聞かないと聞こえない。優しい音」「耳に優しい音」「包み込んでくれるような優しい音色」「繊細で安らぎを与えてくれるような音」「心がきれいになる。落ち着く」と表現している。「落ち着く」という学生が多く、キンダーハープの音が学生の内面に働きかけていることが分かる。他にも「透き通って響くきれいな音」「柔らかく伸びやかな響き」「優しく心に響く音。甘く切ない。一曲聴き終える頃、涙が溢れている。」「眠たくなるような優しく柔らかい音。大きな音が出ない分、耳を澄ませて聞き入れる音色。」などの意見があり、初めて聞くキンダーハープの音について、学生一人一人が様々な言葉を使用し、表現している。

・音から季節感を感じ取ること

調査時期が初夏ということもあり、キンダーハープの音色から「夏」「海」など季節を感じ取る学生もいた。例えば「とてもきれいな音。海で聞きたい。」「心が穏やかになり、周囲の自然の音も聞き取りやすいように感じた。そのせいか、夏が来たって感じがした。」「夏の海で水面を見ているときに流れてきそうな音。ゆったりできる感じ。」「夏を感じるような音」と表現している。他にも「自然な感じで森の中で風に吹かれながら聞くと心地よさそう。」「自然を感じられそうな音色」といったように、キンダーハープと「自然」を結びつけて捉える学生もいた。また少数ではあるが、「涼しそうな感じがした」「涼しげな音色に感じた」といった「涼しさ」までも感じ取っている学生もいた。このようにキンダーハープ一つの音色から学生は多くのことを感じ取っていることが分かる。

・保育現場でのキンダーハープの活用

保育現場においては「午睡」の場面での活用がふさわしいと答える学生や、キンダーハープが子どもに与える作用について述べる学生もいた。

「午睡」に関しては、「音が小さいので午睡の前に演奏すると心地よく眠れると思う。」「音が小さい。お昼寝の時に弾くと良いと思った。」「優しい音がするからお

昼寝前に聞いたら良い」、「お昼寝前に聞きながら眠りたい音」と述べている。

キンダーハープが子どもに与える作用としては、「きれいな音色でとても落ち着くような音。思っていたよりも音が小さかったので、子どもの気持ちも高ぶっている中でも落ち着けると思った」、「落ち着く音色。きれいな音色で子どもたちも落ち着けると感じた」などがある。落ち着く作用以外にも「気持ちの切り替え」として捉える学生もおり、その学生は「優しい音色で小さな音なので心を落ち着けて聞かないと聞こえない。そのことが活動の前に、落ち着くことができたり、気持ちを切り替えるにも良いと思った。『静かにしなさい。』とかそういった言葉で投げかけられるよりもずっと心に届き、「懐かしい音」としても子ども自身の中に残っていくと思った」と述べている。

課題項目②③においては、本学の中庭にて実施した。

課題項目②「外で目を開けた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。」(3分間)

ヘリコプターの音、人の声、葉っぱの揺れ音、歩く音、草刈りの音、工事の音、子どもたちのはしゃぐ声、飛行機の音、風の音、小学生の声、話し声、救急車の音、下水の排水音など

課題項目③「外で目を閉じた状態で耳を澄まし、聞こえた音のすべてを記録してみましょう。」(3分間)

ヘリコプターの音、人の声、葉っぱの揺れ音、歩く音、学校のチャイム、工事の音、子どもたちのはしゃぐ声、枯れ葉が地面とすれる音、鳥の声、鉄と鉄が当たる音、虫の鳴き声、葉っぱが風に吹かれて転がる音、風の音、雀の声、カラスの声、赤ちゃんの声、遠くの車の音、子どもの笑い声、服がすれる音、ネコの鳴き声、バイクのエンジン音など

課題項目④「室内や外での活動で、耳から入る情報以外に、何かを感じ取りましたか。」

(室内)

「雨が降っていたので視覚から雨が物にあたっている音を感じた。」「扇風機の風」「視覚野の強さ」「涼しくてちょうど良いくらい明るい明るさ」

「閉められた空間の雰囲気、人工的な明るさ、調整された温度」「クーラーの風」「誰も話していないとシーンとして少し落ち着かない。」

「蛍光灯の光、エアコンの冷気」「電子機器がたくさん」

(外)

「肌から暑さと自然を感じた。」「風・太陽の光」「視覚の強さと嗅覚・触覚(皮膚感覚)」「暑くてまぶしすぎて目が開けられない。」

「暑さ、明るさ、季節感、虫への警戒心」「開放感、暑さ、真昼の太陽、そよ吹く風」「風・花・草の匂い」「自然がたくさん」

「外は静かで落ち着く感じがした。」「雲の動きやチョウチョが飛んでいた、自然を感じた。」

課題項目⑤では、1回目と2回目の調査を比較して学生が感じたことを自由に記述するよう求めた。

課題項目⑤「室内と室外での活動を比較してみて、何を感じましたか。」

テキストマイニングにおける頻出語として「室内」「感じる」「室外」「聞こえる」「自然」などが挙げられた。

記述内容 (一部抜粋)

・「人工的な音」「自然の音」

室内と室外で聞こえる音の比較においては、室内では「プロジェクターやパソコン、エアコンなどの機械の音」が聞こえてくるのに対し、室外では「木々や草の揺れる音、風の音、鳥や虫の鳴き声などの自然の音」が聞こえてくるという学生が多かった。

・「室外」：自然、開放感、五感が豊かに

室外においては聴覚だけではなく、触覚、視覚、嗅覚から様々な情報を得られたと答える学生が多かった。肌で風や暑さを感じたり、緑溢れる自然を見たり、風・花・草の匂いを嗅いだりと、聴覚以外にも多くのことを感じ取っていることが記述内容から分かる。また室外では全身で自然を感じ取ることによって「気持ち的に開放感があった」と答える学生も多く、例としては「室外では普段意識していない自然が生む音を感じ、和んで穏やかな気持ちになれた」、「室外では自然の音、風を感じて幸せな気持ちになる」、「外のほうが気持ち的に開放感がある」「外は健康的だと思った。自然の暖かさがある」、「外は開放感がある」「外のほうが気持ちいい」といった声があった。他にも「室外だとすごく広い世界の中の一人なんだと思った。自分以外の人や物の営みを感じられた。室内では自分は『建物の中』にいるという感覚が印象深くなり、『外の世界』に対し、耳を澄まし音や生活を感じた。室外にいて自分で自分以外の世界と共に生きているという感覚が感じられ

た」と学生は述べ、環境によって感じ方も大きく変化している。

多くの学生が室外では、聴覚だけではなく、五感を使って全身で自然を感じ取っていることが記述内容からうかがえる。

一方、調査日は日差しが強く、高温だったため、「集中して耳を澄ますことができない」「暑かったので3分が長く感じた」「室内のほうが落ち着いて聞くことができた」という声もあった。

5. 考察

共起ネットワークから学生の気づきを考察する。(資料参照：共起ネットワーク)

1回目の調査の課題項目③における共起ネットワークからは、「集中」「聞き取る」「できる」が関連しているように、意識して音を聴きとる姿勢が見られる。また「聴く」「心臓」「取る」「感じる」の関連としては、「目を閉じることによって自分の心臓の音を感じ取ることができた」と記述している学生もいることから、目を閉じることで普段は気づかない音にも気づいている様子が分かり、「風の音」「車」「遠く」「呼吸」に関しても同じようなことが分かる。

これらのことから、意識的に耳を澄ますことによって、学生は身の回りにある音に気づくことができたと考えられる。

1回目の調査の課題項目④における共起ネットワークからは、「音」「聞こえる」「普段」「感じる」「澄ます」「耳」などが関連していることが分かる。これに関しても課題項目③とも関連するが、日常の音に耳を澄ます活動を通して、普段は気づくことができなかったことに、学生自身、様々な気づきがあったことを示している。自由記述には、「意識していないと気にならない音でも、耳を澄ますと思っていたよりも大きな音だと気づいた」「日常には音が溢れているが、普段は見逃してしまっているものや音などの環境があると思った」など、意識的に目を閉じて音に集中したことにより、日常の音に気づくことができたことが読み取れる。また学生の中には、子どもとの関わりに関して、「子ども自身が経験する様々なことに対して反応できる感性を養っておきたい」という意見や「子どもたちとも静かにして、聞いてみる活動をしてみたいと思った」など、自身の体験から、実際の保育現場でも「耳を澄ます活動」を取り入れてみたいと考える学生もいた。これらの

自由記述から、学生は今回の体験を通して、子どもと関わる保育者として、子どもの気持ちの変化や感動する気持ちに共感するためには豊かな感性が必要であることを少なからず気づくことができたのではないかと考える。

2 回目の調査の課題項目①における共起ネットワークを見ると、「子どもたち」と「落ち着ける」が関連していたり、「繊細」「安らぎ」「くれる」が関連している。その他、「音」と「小さい」や、「耳」と「澄ます」の関連などが見られた。近年、井藤ら(2021)²⁶の研究では、キンダーハーブのように共鳴箱がないアルトライアールと呼ばれる楽器を演奏した時に、演奏者の脳波を測定したところ、心地よさと深い安らぎを感じていることが示されたという²⁷。この井藤らの研究結果から、今回の調査でもキンダーハーブを聞いている側にもそのような効果があったのではないかと考える。

2 回目の調査の課題項目④から、学生は聴覚だけでなく、その他の様々な感覚を通して周囲の環境を感じ取っていることが分かった。具体的には肌で感じる暑さや寒さ、風、自然を感じとるような皮膚感覚、草花の匂いなどを感じる嗅覚、目から入ってくる情報を理解する視覚などを働かせ、周りの環境を捉えていた。「耳を澄ます」環境を整える上で、キンダーハーブの一つの役割を果たすことができるのではないかと考える。

2 回目の調査の課題項目⑤における共起ネットワークを見ると、「室内」と「聞こえる」、「室外」「自然」「感じる」などの関連が見られた。これは調査場所の学校の園庭には屋根がなく、調査日は31度という炎天下であったため、暑さから落ち着いて聞くことが難しかったことが考えられる。小西ら(2016)²⁸は、保育者自身が声の出し方に注意をし、互いの声が自然に聞こえるような静けさの中でこそ、乳幼児は保育者の声の表情や様々な感情の動きを感じ取ることができるとしており、幼児が「音」を意識するような言葉かけをすることが保育者の役割として重要だと述べている。保育者は集中して耳を澄ます活動が行えるような環境を整えることが求められる。

今回の調査では、時期が6月下旬ということもあり、雨に関する記述、暑さに関する記述が多く見られた。このことから、季節によって学生が聞き取る鳥や虫の声、感じることも異なることが考えられる。吉永(2021)は「乳幼児にとって、そこに生えている草、虫、木々を揺らす風、こずえで鳴く鳥、窓に刺す光とその影、床の軋む音…などなど、身のまわりの環境のすべてが、

乳幼児に刺激を与え、気づきや学びのきっかけを提供する素材である」²⁹とし、子どもの周りの環境をいかに構成するのかがということが保育者の大切な役割としていっている。このことから保育者は子どもと室内だけで過ごすのではなく、室外で過ごすことも子どもにとってたくさん学びがあることを理解する必要がある。

1 回目の調査①②と 2 回目の調査②③の考察

室内で行った 1 回目の①②の調査は、遠隔対面併用授業であったため、学生によって聞こえる音も異なっていたが、共通点としては「エアコンの音」「プロジェクターの音」「テレビの音」「扇風機の音」などの機械音が聞こえたという意見が多かった。また、室外で行った第 2 回目の調査③④では、「飛行機の音」「ヘリコプターの音」「バイクのエンジン」などの機械音以外に、「葉っぱの揺れる音」「風の音」「枯れ葉が地面とすれる音」「鳥の声」「葉っぱが風に吹かれて転がる音」「カラスの声」「ネコの鳴き声」など、自然に関する音の記述が多かった。室内・室外ともに、目を開けた状態と目を閉じた状態の両方で行ったが、目を閉じたほうが集中して聞くことができたという学生が多かった。

今回の調査では室内と室外両方で行ったが、学生の記述において、「室外の方が、五感がよく働き、より多くのことを感じ取れる」といった意見が多かったことから、保育者自身の豊かな感性を磨く上で、自然環境も一つの大きな役割を果たすことが考えられる。

6. 結論

本稿は、「環境を通して行う教育及び保育」を体験的に学ぶ一つの方法として「耳を澄ます活動」を行い、学生の自由記述から気づきや学びの傾向を明らかにすることを目的に調査を行った。

2 回の調査から、「耳を澄ます活動」を通して、多くの学生が新たな発見や気づきがあったことが明らかとなった。「耳を澄ます活動」における調査結果から、学生それぞれの気づきや学びは異なるが、以下の 5 つの学びがあったと考える。

1 点目は、日常生活の音を意識的に聞くことの面白さを感じていることである。

2 点目は、室内・室外、キンダーハーブという楽器、目を開けている状態と閉じている状態など、様々な環境下で「耳を澄ます活動」を行ったことで、聴覚だけではなく、五感で様々なことを感じ取っていることが分

かったことである。

3点目は、一つの音から広がる表現の豊かさである。「雨の音」一つとっても、学生によって擬音語の表現の仕方が異なっていた。また目を開けた状態と閉じた状態では「雨の音」の聞こえ方が違うと述べる学生もいた。「キンダーハーブ」に関しては「夏」を連想する学生もあり、一つの音から、想像が広がり、表現の仕方も様々なであった。

4点目は、室内と室外の比較から、学生なりに「音の分類」をしていることが分かった。特に室外においては「自然の音」がよく聞こえたと述べる学生が多かった。

5点目は、保育現場での「耳を澄ます活動」の活用である。本学が保育者養成校であることから、保育現場での活用について「普段見逃しているものや音などの環境があることに気づき、子どもと様々なことに反応できる感性を養っておきたい」という意見や、キンダーハーブは、「優しい音色で落ち着く音なので、午睡の前に弾くと良いと思う」など、将来保育者として働いたときに、「耳を澄ます活動」を取り入れたいという意見があった。一部の学生にとっては、今回の調査が、将来保育者として子どもと関わる上で豊かな感性を養っておくことの重要性に気づききっかけとなったと考えられる。

今回の調査により、これらの5つの点において学生の気づきや学びがあったことが考えられる。

今まで保育・教育の場では「音」の環境に関してはほとんど重視されてこなかったが、2017年に改定された要領・指針で自然や生活の中にある音に耳を傾けることの重要性が付け加えられたように、子どもの生活や発達を保障する上での「耳を澄ます」という活動は重要となってくる。志村(2003)³⁰は、日本の教育・保育では「子どもの賑やかさ」を容認する背景や保育文化も根付いていることを指摘し、時には子どもが静粛な音環境を味わうことの意義を理解する必要があると述べている。また保育者の感受性を育成する上において「耳を澄ますこと」が重要と唱える吉永(2016)は「幼児期における音感受教育」が重要であると示している。吉永によると「音感受教育とは、音感受の質を上げていくことであり、音感受の質をあげるとは、はじめはきわめて素朴なものでしかなかった音感受が、何度も繰り返す試みることで、豊かな意味深いものへと変容することであり、そのためには保育者が鋭敏な感性をもっていること、豊かな音環境が整えられていることが不可欠である」³¹と述べる。

幼児教育・保育において保育者の感性を磨くことは重要とされており、その磨かれた感性によって子どもたちが環境とのかかわりの中で感じ取る充実感や満足感、喜び、不思議や驚きの気持ちに気づくことができる。子どもにとってはその心を動かされた体験を、周りにいる保育者や子どもと共有できることで、その体験がさらに深まり、豊かな経験となる。子どもにとってこの心を動かされる体験の重要性を保育者自身が理解し、日々の保育の中で子どもたちとその体験を共有することが、生きる力の基礎を育む上で重要な要素となる。

今回の調査における学生自身の自由記述から様々な気づきがあったことが明らかとなり、「耳を澄ます活動」は感性を磨く上で、少なからず、役割を果たすことができたのではないかと考える。

今後の課題としては4点ある。

1つ目は、今回の調査を基に、表現方法を増やすことである。今回の調査では感じ取ったことを言葉で表現するのみであったが、今後は聞いた音を絵で表現したり、自然物を使って製作したりするなど様々な方法で表現することによって、学生の創造力を育て、豊かな感性を身につけられるような授業展開を考えたい。

2つ目はより多くの環境を設定し、対象学生も増やすことである。今回の調査では自宅、本学の教室・中庭での調査であったが、森などの自然豊かな場所でも調査したい。また調査時期が初夏と限定されていたが、他の季節にも調査することによって、季節ごとによる感じ方の違いについても調査したいと考えている。またより多くの学生を調査対象とすることで、学生の気づきや学びの傾向を調査したい。

3つ目はコロナウィルスの影響による気づきや学びの変化があったのかを調査することである。今回はコロナウィルスの影響により、1回目の調査においては同じ条件下で調査することが難しく、限界が生じた。2回目では条件をそろえることができたが、室外で耳を澄ます活動を行った際に、一部の学生の記述に、「外のほうが開放感がある」、「風が心地よかった」、「自然の生む音を感じ、和んで穏やかな気持ちになれた」など、室外に出ることで気分が晴れたことを示していることが考察され、これらはコロナウィルスが流行する中で、室内で過ごす時間が増えたことによる影響ではないかと推測する。しかし、今回の調査では、コロナウィルスによって学生の生活がどの程度、変化したのか、室内での時間が増えたことにより、何を感じているかな

ど詳細まで調査できなかったため、今後の課題とする。

4 つ目は保育現場での活用である。保育者を指す学生を対象に行ったため、保育現場でも活用してみたいという声も多かった。子どもを対象に「耳を澄ます活動」を行った場合、どのようなことが観察されるのか、また保育者と子どもでは感じ方が異なるのかなどを調査したい。言葉のみで表現するのではなく、絵で表現したり、製作したりすることによって、保育をさらに展開させることができるだろう。

今回の調査では「耳を澄ます活動」を通して、体験的に「環境を通して行う教育及び保育」について理解を深められたのではないかと考える。

今後はさらなる発展のため、以上 4 点を今後の研究課題としたい。

7. 引用文献・参考文献

井藤元、山下恭平、徳永英司(2021)「シュタイナー教育における楽器演奏時の脳波の分析」『東京理科大学教職教育研究』第 6 号、13-23 頁

吉良創(2002)『シュタイナー教育の音と音楽—静けさのおおいの中で—』学習研究社

厚生労働省(2020)『保育所保育指針解説』フレーベル館

厚生労働省〈平成平成 29 年告示〉保育所保育指針

佐々木由美子・近末克紀(2021)「幼児教育における環境を通して行う教育としての仕掛け」『足利短期大学研究紀要』41(1)、31-40 頁

志村洋子(2003)「幼稚園・保育所における保育室内の音環境 コミュニケーションを支える音環境」『騒音制御』日本騒音制御工学会、27(2)、123-127 頁

志村洋子(2016)「保育活動と保育室内の音環境—音声コミュニケーションを育む空間をめざして—」『日本音響学会誌』72(3)、日本音響学会

小西行郎、志村洋子、今川恭子、坂井康子(2016)『乳幼児の音楽表現—あかちゃんから始まる音環境の創造(保育士・幼稚園教諭養成課程)』中央法規出版

重成久美・篠永洋・吉牟田美代子(2011)「保育者養成課程における「環境を通して行う保育」を重視した授業の展開 I—保育実習 I に向けた教科間の連関を通して」『活水論文集 健康生活学部編』54、91-101 頁

清水桂子(2015)「保育者養成における遊びの実際から理解へ導く[保育内容総論]の授業展開と一考察」『北翔大学短期大学部研究紀要』第 53 号、71-78 頁

土田義郎(2007)「サウンドエデュケーションの技法 基本的考え方と応用例」騒音制御、第 31 号、日本騒音制御工学会

文部科学省〈平成 29 年告示〉幼稚園教育要領

文部科学省(2019)『幼稚園教育要領解説』フレーベル館

内閣府、厚生労働省、文部科学省〈平成 29 年告示〉内閣府・文部科学省・厚生労働省(2019)『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館

平松美由紀(2019)「環境を通して行う保育に関する一考察—乳幼児に関わる保育者の人的環境としての役割」『中国学園紀要』(18)、107-112 頁

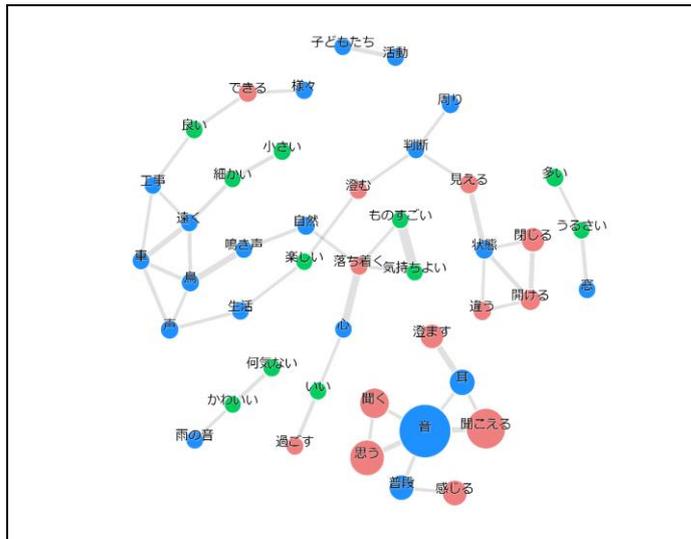
森本朋佳(2018)「保育内容総論の授業実践報告」『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』第 48 号、299-313 頁

吉永早苗著、無藤隆監修(2016)『子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究—』萌文書林

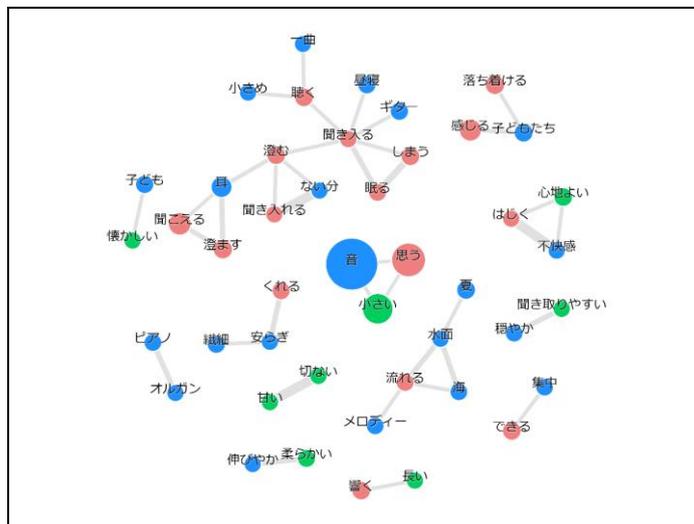
吉永早苗(2021)『「音」からひろがる子どもの世界』ぎょうせい

ピアスーパーバイザーからのコメント

本論文は「保育内容総論」の授業において行われた活動に関しての実践報告である。学生が「環境を通して行う教育及び保育」を体験的に学ぶ方法として稿者は「耳をすます活動」を実践され、保育者養成校での感性教育の意義や展開方法、事後の学生の感想などを詳細に記されている。学生たちの取り組みの様子は授業を展開していく中で参考になるものであり、本実践報告の知見がより多くの教員に共有されることを願っている。(担当：辻本恵)



2回目の調査・課題項目①における共起ネットワーク



2回目の調査・課題項目⑤における共起ネットワーク

- 18 文部科学省、前掲書『幼稚園教育要領解説』244頁
- 19 土田義郎(2007)「サウンドエデュケーションの技法 基本的考え方と応用例」騒音制御、第31号、日本騒音制御工学会、26-30頁
- 20 環境音について研究していたマリー・シェーファー(1933～)が、周りの音を聴く耳を育む方法として「サウンドスケープ」という造語を出し、この思想を教育現場へと応用したものを「サウンドエデュケーション」と呼ぶ。(吉永,2016, p.17)
- 21 土田,前掲書,26頁
- 22 土田,前掲書,27頁
- 23 シュタイナー教育で使われる楽器。シュタイナー教育において耳を澄ます活動は重視されており、キンダーハーブもその一連で作られた楽器である。
- 24 高橋弘子(1997)『日本のシュタイナー幼稚園』水声社、137頁
- 25 吉良創(2002)『シュタイナー教育の音と音楽—静けさのおおいの中で—』学習研究社、171頁
- 26 井藤元、山下恭平、徳永英司(2021)「シュタイナー教育における楽器演奏時の脳波の分析」『東京理科大学教職教育研究』第6号、13-23頁
- 27 前掲書、井藤ら、20頁
- 28 小西行郎、志村洋子、今川恭子、坂井康子(2016)『乳幼児の音楽表現—あかちゃんから始まる音環境の創造(保育士・幼稚園教諭養成課程)』中央法規出版、89頁
- 29 吉永早苗(2021)『「音」からひろがる子どもの世界』ぎょうせい、71頁
- 30 志村洋子(2003)「幼稚園・保育所における保育室内の音環境 コミュニケーションを支える音環境」『騒音制御』日本騒音制御工学会、27(2)、123-127頁
- 31 吉永早苗著、無藤隆監修(2016)『子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究—』萌文書林、32頁